

## 『愛宕百韻』の注解と再検討

勢田 勝郭

## Reconsideration of Atago-Hyakuin

Katsuhiko SETA

『愛宕百韻』については、昭和五四年に刊行された『新潮日本古典集成 連歌集』において、島津忠夫氏による注解が施されているが、以後の連歌研究の進展の結果として、今日では不十分な所の多いものとなっており、それが、歴史関係等、連歌に親しみのない人の間に間違った解釈が流布する状況を齎している。本稿は、それに対し、今日の研究レベルに則した新たな注解を提供しようとするものである。

本能寺の変に先立って、天正十年五月、愛宕山威徳院において明智光秀が張行した連歌、いわゆる『愛宕百韻』は、今日では、多分、あらゆる連歌作品中、最もよく世に知られたものと言える。本稿の目的は右に記したとおりであるが、その前に、当該の作品には二つの大きな問題が存在するにもかかわらず、それが放置されたまま一般に通用してしまっているということを指摘しておきたい。

一つは発句の本文の問題である。「時は今天が下しる五月かな」の形が広く用いられているが、続群書類従本、京都大学平松文庫本などは、中七字が「天が下なる」の形である。「しる」と「なる」と、一字の違いではないが、内容的には大差である。何故「なる」の形が、検証されることなく斥けられるのか。当該の連歌が、本能寺の変に先立ち、光秀が自らの決意を披瀝したものであるという固定観念があるためであるまいかという疑問である。

もう一つは、張行日の問題である。『惟任謀反記』『信長公記』以下、諸々の編纂された史書の類は一致して「五月二十八日」とするが、一次史料ともいえるべき百韻それ自体の写本の日付に「五月二十八日」とあるものは存在しない。続群書類従本と国立国会図書館本は「五月二十七日」、それ以外の写本は、私の見た限り「五月二十四日」である。この問題をどう理解すればよいのであろうか。

以下、私見を述べる。結論を先に言えば、まず、発句の本文は「天が下なる」でなければならぬ。そう考える根拠は、以下のとおりである（注1）。

①もし発句が「天が下しる」の形であったなら、信長に代わって天下人たろうとする光秀の意思は、その披露の瞬間に、一座の全員に共有される（絶対！）。しかるに、光秀が明智左馬助以下の一族・重臣に本能寺襲撃の意思を打ち明けたのは六月一日夜とのことである（注2）。運命を共にする一族・重臣よりも先に、その日にも京に戻る連歌師連中に一世一代の決意を明かすということは、常識として有り得まい。帰京後、一人でもそのことをその筋に漏らせば、一切は瓦解する。その秘密の保持を、彼ほどのように考えたのか。独吟にすれば、その点での危惧はないのに、彼は何故そうしなかったのか、納得できる説明を聞かない。

②事件後、一座した連歌師たちは、誰も罰せられていない。これをどう理解すればよ

いのか。『常山紀談』などに見える、紹巴が、懐紙に「し」とあったのを削って、その上にまた「し」と書いて、自分が一座した連歌の場では「な」であったと言いつたなどという話を信じればよいのか。それより、最初から「天が下なる」の形であったので、問題とはなるはずがなかったと考える方が、余程自然であろう。

③ 変の当日、紹巴は、二条新御所から本御所に徒歩（明智方から、馬や駕籠の使用を禁止された）で脱出中の誠仁親王御一家をたまたま新在家付近で目撃し、「荷輿」を手配してそれにお乗せしたという記事が見える（兼見卿記・別本）。皇族に対する彼の尊崇の念の並々でないことが窺われる記事であるが、親王の住まわれていた二条新御所は、信忠の宿所であった妙覚寺に隣接していた。光秀の企図が実行されると、現実にもそうであったように、その混乱に巻き込まれるのは必至である（人質とされる可能性すらあった）。もし、紹巴が光秀の謀反を予期していたのなら、彼は、何故、事前に親王に避難の警告（これは、その筋への密告とは性質が異なる）をしなかったのだろうか。彼も変を予期していなかったと考えるのが、やはり自然であろう。

④ 現在流布している『信長公記』では、当該句は「天が下しる」の形で引用されているが、それは池田家本『信長記』では「天が下なる」となっている。池田家本『信長記』は、慶長十五年、八十四歳の時の太田牛一の自筆本であるが、以後も、著者が手元に置き随時修正を加えた本であることは、現存の様態から見てもまず確かなことと考えられる。そうであるなら、光秀が「愛宕百韻」において謀反の決意を披瀝したという現在の通説は、『信長公記』の著者が、最終的に誤りであると考えた本文に則った、いわば誤謬の上に築かれた説であったということになろう。

⑤ 近年注目されるようになった「五月二十八日付福屋隆兼宛光秀書簡写」に拠れば、まだその時点では、光秀は山陰方面へ出陣するつもりであったことが推測される（注3）。

⑥ 光秀の決断は、信長が本能寺に宿泊し、かつ、引率の人数が少数であることを、彼自身が確信していることが条件であったと私は考える。しかるに、信長が実際に本能寺に入るのには、五月二十九日の申刻以後のことである（兼見卿記）。信長の行動は時に気まぐれであり予測しがたい。この度の上洛の場合も、信忠は、五月二十七日になってようやく父が「一兩日中」に上洛することを知り、堺へ行く予定を急遽変更している（五月二十七日付森乱宛織田信忠書状）。五月二十七日の時点で、京にいた長男・信忠すらまだ信長上洛の正確な日時を知らない。まして、その日から二十八日にかけて愛宕山に参籠していた光秀が、その間、信長の正確な動静を知ることとはできなかったはずである（注4）。

次に、張行日については、候補は五月二十四日、同二十七日、二十八日の三つであるが、光秀は五月二十六日に坂本を出発し、亀山に入城したとするのが通説（信長公記）

で、それを否定する説を知らない。それに従う限り、五月二十四日とする説は可能性が乏しい（注5）。残るのは二十七日と二十八日であるが、ここで私が注目するのは、五月二十七日、光秀のみならず紹巴等の連歌師たちもすでに愛宕山に来ており、当該百韻の発句以下一巡は、その日のうちに詠まれたとする『林鐘談』の記述である。『林鐘談』は、その記述をそのまま事実と受け取ることは到底できないレベルの史料ではないが、そこに事実の痕跡ぐらゐはあると考えることは、決して許されないことではあるまい。もしそうなら、当該の連歌が二十七日から二十八日にかけて作られた可能性も考えられると私は思うのであるが、いかがであろうか。俳諧でも、歌仙などが二日乃至それ以上に亘って詠み継がれることは、よくある事象である（例えば『曾良随行日記』の記事を参照されたい）。当該百韻についていうと、始行は二十七日。従って、端作の日付は天正十年五月二十七日となり、翌日、百韻が詠了の後、懐紙を奉納、それを以って、『信長公記』等は、この百韻を二十八日のものとしているということである。仮定の上に仮定を重ねたものでしかないが、それを私の説としたい。

注1…『愛宕百韻』については、『連歌概説』（一九三七年）以来、多くの連歌研究者の言及する所であるが、強く「天が下なる」を支持する意見を知らない。ただし、歴史の方面では、古く桑田忠親氏が唱え（一九七三年『明智光秀』、近年では明智憲三郎氏のネット上等での精力的な活動がある。更に、明智氏は、「天が下しる」のテキストは、大村由己の改竄に因るものと主張される。私も、その説を是とするものであるが、発句の解釈については、氏と見解を異にする。

注2…この点については、『信長公記』、『川角太閤記』、フロイス『日本史』、全て一致している。三点とも二次的史料であるが、それを否定する一次史料もない。

注3…ただし、藤田達生氏『証言 本能寺の変』（二〇一〇年）では、当該書簡に対する疑問が述べられている。氏の疑問は、その書簡中に「委曲山田喜兵衛自可有演説候」とあることから、山田喜兵衛自身がその書簡の持参者として福屋隆兼の所へ向かったと考えた上でのことである。しかし「別途、山田喜兵衛を派遣するつもりなので、詳しくは」云々という意味に解釈することはできないのである。そうであるなら、山田喜兵衛の名が「天正十年六月二日付西尾光教宛書簡」に出ていることと矛盾しない。むしろ、予定されていた派遣が行われなかったということ、事件の突発的だったことを暗示する事象として用いることができるのではあるまいか。なお、藤田氏の疑問が正当なものであったとしても、①⑤⑥として列挙した理由の一つが無効となるだけのもので、私の結論は変わらない。

注4…ここで私が気になるのは、『川角太閤記』に「六月朔日、申刻計りに、家中の物がしらに申し出でしには、京都、森お乱所より、上様御詮には、中国への陣、用意出で来候はば、人数のたきつき、家中の馬ども様子御覧なさるべく候ふ間、早々人数召し連れられ、罷り上り候へ」と、お乱所より、飛脚到来候ふ間」云々とあるこ

とである。森お乱（蘭丸）から飛脚があつて云々の台詞は、従来、兵を京都に向かわせる際の口実とされてきたが、実際にあつたこととは考えられないだろうか。それに拠つて、光秀は、信長が殆ど無警戒な状態で本能寺に宿泊していることを知り、決断したというストーリーである。それは、多分二十九日夜のことであつたらう。ただし、所詮、私の憶測の一つである。

注5…五月十八日から二十五日までの間の光秀の動静を示す一次史料はない。しかし、二十四日に愛宕山で連歌を詠んで、一旦、坂本（京都の可能性もあり）へ戻り、二十六日にまた亀山に赴くというのは、かなり不自然なコースとスケジュールである。

以下、『愛宕百韻』の本文は、続群書類従本を基礎とし、他本と校合して、仕立・付合・去嫌の面でもっとも問題がないと思われるものを設定して用いた。ただし、紙幅の都合上、その設定の過程について述べることは省略せざるを得なかった。また、寄合の指摘も連歌の注解では重要であるが、これも必要最小限とした。了解されたい。去嫌については、末尾に一覧表の形で示すこととした。それについては、拙稿「連歌去嫌の総合的再検討」（奈良工業高等専門学校「研究紀要」第五二号）を参照していただきたい。ネット上で見ることができる。一覧表の「凡例」も、そこに譲る。

### 賦何人連歌

#### 01 時は今天が下なる五月かな

光秀

《解釈》今、この時節は、地上の全てのもので、天から降る雨に覆われる五月なのだ。この作品の張行の企図は、光秀が信長から命じられた西国出兵の任務成就の祈願。「天が下なる」という表現の中に、地上の全てのもので雨が降り覆われることくに国土が一天の下にまとまるようにとの予祝を込める。決して、単純な叙景の句ではない。

※賦物は「何人」、句中の「天」によって「天人」と賦される。諸本、賦物を記さないものが多いが、『新潮日本古典集成』（以下『集成』と略）に拠つて補う。

※「時は今」は、中七字が「天が下しる」であれば、「時」に「土岐」が掛けられているとしなければ解釈ができないが、「天が下なる」では、普通に「今この時は」で可。

※「天が下」は「天下」の訓読語で「地上」に対応する表現。天の下にある全てのもので、即ち、地上の全てのものでということである。「天」に「雨」が掛けられており、「天から降る雨の下にある全てのもの」という意味になる。

※作者・光秀は、惟任（明智）日向守光秀。土岐氏の末流と伝えられるが、近年異説も唱えられている。連歌を好んだことは、『五吟一日千句』など、かなり多くの作品が伝えられていることより知れる。出句数十五句。

#### 02 水上まさる庭のなつ山

行祐

《解釈》今、この時節は、地上の全てのもので、天から降る雨に覆われる五月なのだ。この庭に導かれた流れの水位も高くなり、眺められる周囲の山々も、夏らしく緑が深い。

※『信長公記』の流布本は、下七字を「庭のまつ山」とする。発句と脇は同季でなければならぬが、それでは無季となつてしまい明白に不可。池田家本『信長記』は、ちゃんと「庭のなつ山」と訂正されている。

※作者・行祐は、張行場所である愛宕山威徳院西之坊の主。生没年等不詳。「発句客人脇亭主、第三宗匠」の作法に従つて、脇を詠む。十一句。神仏習合の愛宕権現の祭神・太郎坊の本地仏は勝軍地藏で、甲冑を纏い、騎馬した地藏菩薩の姿である。戦勝祈願の連歌の場にもふさわしい。

#### 水上まさる庭のなつ山

紹巴

《解釈》桜花が散り落ちる庭の池、一斉に散つた花弁が柵となつて流れを堰きとめると、次第に上流の池の水位が上昇する。眺められる周囲の山々も、いかにも夏らしく緑が深い。

※水に落ちた花弁が柵となつて、流れを堰くという発想は、「池に桜の散るを見てよみ侍りける…桜散る水の面には堰きとむる花の柵かくべかりけり」（千載・二、九九、能因法師）など、数多い伝統的なものである。

※作者・紹巴は、句境の変化を重視する新風連歌を確立した当時の連歌の第一人者。この座の宗匠を務める。十八句。慶長七年没、七九歳（実際は七八歳とする説あり）。

#### 花落ちる池の流れをせきとめて

宥源

《解釈》晩春の夕暮、風に散らされた花弁が池の面に落ち、柵をなつて流れを堰きとめているがごとくである。霞も、風に送られてどこかへ消えてしまった。

※前句の「花落ちる」を「風」で理由付けた付合である。

※作者・宥源は、愛宕山大善院上之坊の僧。十一句。生没年等不詳。

#### 風に霞を吹きおくる暮

昌叱

《解釈》春となつたが、時にまだ寒さの厳しい日がある。夕方から風が吹きはじめ、霞もどこかへ行つてしまった。入相の鐘の響きも冴え冴えとしている。

※作者・昌叱は紹巴一門の連歌師。当時、紹巴に次ぐ存在であった。一六句。慶長八年没、六五歳。

春もなほ鐘の響や冴えぬらむ  
06 片しく袖は有明の霜

心前

《解釈》旅での野宿。明方、鐘の音を覚ます。春はまだ浅く、響きも冴え冴えとしている。片敷く袖が白く見えるのは、霜なのであるか、有明の月の光が、私のこぼした涙に映じているのであるか。

※先の付合は夕時分の情景であったが、この付合では、明方のこととなる。

※「鐘」と「霜」とが寄合。「高砂の尾上の鐘の音すなり曉かけて霜やおくらむ」(千載・六・三九八、前中納言匡房)。「霜の鐘」の故事である。

※作者・心前は紹巴一門の連歌師。一五句。天正一六年没(異説あり)、五三歳か。

片しく袖は有明の霜

07 末枯れになりぬる草の枕して

兼如

《解釈》晩秋の旅の野宿。周囲の草はもう末枯れとなっている。片敷く袖が白く見えるのは、霜なのであるか、有明の月の光が、私のこぼした涙に映じているのであろうか。

※作者・兼如は猪苗代家の連歌師。一二句。後、仙台の伊達家に仕え、慶長十四年までの作品が残る。

末枯れになりぬる草の枕して

08 聞きなれにたる野辺の松虫

行澄

《解釈》あたりの草が末枯れになった野辺に一夜を過ごす。松虫の鳴く音が聞こえるが、それももう耳慣れたものになってしまった。

※作者・行澄は、大阪天満宮蔵の一本に「東六郎兵衛」と注記される。美濃の名家・東氏の一族か。ネット上では、光秀の家臣で、山崎の合戦で戦死とあるが、真偽は不明。出句はこの一句のみ。執筆を務めたものであろう。

聞きなれにたる野辺の松虫

09 秋はたど涼しきかたに行きかへり

行祐

《解釈》秋となったが、残暑はまだ厳しい。何日か、涼を求めて野辺に行きかえりするうちに、松虫の声も、次第に耳慣れたものになろうとしている。

秋はたど涼しきかたに行きかへり

10 尾上の朝け夕暮の空

光秀

《解釈》秋となったが、残暑はまだ厳しい。ここ数日は、色づきはじめて尾上の朝時分や夕暮時の空の景色などを眺めつつ、涼を求めて行きかえりして過ごしている。

尾上の朝け夕暮の空

11 たちつゞく松の梢や深からむ

有源

《解釈》朝夕の尾上の上空の景色を眺める。松は、木深く立ちつづいていて、尾上に立って松ならなくに「古今・一七・九〇八、よみ人しらず」など。

たちつゞく松の梢や深からむ  
12 波のまがひの入海の里

紹巴

《解釈》松が木深く立ちつづく入海。海士の住む里が波のむこうにちらちらと見える。※「波のまがひ」は、波の向こうにちらちらと見えること。「寄せかへる波のまがひに飛ぶ蜚」(慶長三年十二月二十一日「懷旧」一五)の例が分かりやすい。

波のまがひの入海の里

13 漕ぎかへる蟹の小船のあと遠み

心前

《解釈》海士の小船が漁を終えて航跡を長く引きつつ帰ってゆく。帰るべき入江の里は、波の向こうにちらちらと見わたされる。

漕ぎかへる蟹の小船のあと遠み

14 へだよりぬるも友千鳥鳴く

昌叱

《解釈》海士の小船が漁を終えて航跡を長く引きつつ帰ってゆく。二羽の千鳥が、離ればなれになりつつも、互いに鳴き交わす声が聞こえる。

※第二句から水辺が三句連続しているので体用の沙汰が必要であるが、第一四句の「千鳥」は体用の外であるので、問題は生じない。

へだよりぬるも友千鳥鳴く

15 しばしたど嵐の音もしづまりて

兼如

《解釈》大きな音をたてて吹いていた嵐の風は、しばらく静かになった。風に吹き流されて離ればなれになった二羽の千鳥が、互いに相手を求めて鳴いている声が聞こえる。

※二羽の千鳥が隔てられたのは、風に吹き流されたからだと理由付けた付合である。

しばしたど嵐の音もしづまりて

16 たどよふ雲はいづくなるらむ

行祐

《解釈》大きな音をたてて吹いていた嵐の風は、しばらく静かになった。空の雲は、どこへ流されて行くかとしているのだろうか。

たどよふ雲はいづくなるらむ

17 月は秋秋はもなかの夜半の空

光秀

《解釈》中秋の名月。夜空は晴れわたっている。少し前まで漂っていた雲は、どこへ行ってしまったのだろうか。

月は秋秋はもなかの夜半の空

18 それとばかりの声仄かなり

有源

《解釈》中秋の名月の夜、空の彼方から、仄かであるがはっきりそれと判るように、雁の声が聞こえる。

※「それとばかり」に「雁」を利かしている。「隠題」と呼ばれる手法で、古くからあるものであるが、同時代の連歌では特に好まれ、例は多い。他に「それかとばかり鳴き帰る空」(永祿石山千句・第三「山河」二〇)など。

※第一四句で「千鳥」が詠まれている。「千鳥」と「雁」とは、五句以上を隔てねばならないが、隠題の場合は、間隔二句で可とされるので、指合とはならない。  
 ※『集成』は「一句としての意味も、付合も不明」云々とコメントするが、そんなことはない。一句の意味も付合も明瞭で、何の問題もない。

それとばかりの声仄かなり

19 たゞく戸のこたへほど経る袖の露 紹巴

《解釈》恋しい人の家の戸をたたぐが、中々応答がない。時がかなり経ってから、ようやくそれと知れる声はほのかに聞こえてきた。その間にも、私の袖は、びっしょりと夜露に濡れるのだ。いや、夜露だけではない、私の涙も含まれているのだ。

たゞく戸のこたへほど経る袖の露

20 我よりさきに誰契らむ 心前

《解釈》恋しい人の家の戸を敲く。時がかなり経過しても全く応答がない。何故だろうか。ひよつとして、私が来るより先に約束している男がいて、その男と会っているのだろうか。その間にも、私の袖は、びっしょりと夜露に濡れるのだ。いや、夜露だけではない、私の涙も含まれているのだ。

我よりさきに誰契らむ

21 いとけなき気配ならぬは妬まれて 昌叱

《解釈》ようやく会うことができた人なのだけれど、実際に会ってみると、何事にも物慣れた様子である。どうも、私よりも先に、この女をものにした男がいるらしい。そう思うと、その男のことが、何となく妬ましく感じられる。

※解釈にいささか下卑た言い回しを用いたが、パレ句的な付合なので、その方がそのニュアンスが表現できると考えたからである。御寛恕を乞う。

いとけなき気配ならぬは妬まれて

22 と言ひかく言ひ背く苦しさ 兼如

《解釈》以前のしおらしい様子はどこへ行ったのか。ちよつとしたことで嫉妬して、私をあれこれ責めた挙句、ふいと背中を向けてしまう。こんな古女房の相手は苦しいものだ。

※色々な状況設定が可能であるが、右のごとくとした。これもパレ句的だが、如何。

と言ひかく言ひ背く苦しさ

23 たび／＼のあだの情は何かせむ 行祐

《解釈》苦しさをいくら訴えても、何やかやと言ひ逃れめいたことを言つて、背中を向けてしまう。こんなことが、今までに何度あったことか。所詮、この人は、私を心から愛している訳ではないのだ。

※先の付合を、男女の立場を引き換えて処理した付合である。これはこれで一興であろうが、「恋」が制限一杯の五句連続することになるので、次の句が難しくなる。

たび／＼のあだの情は何かせむ

24 頼みがたきはなほ後の親 紹巴

《解釈》心の底から愛されている訳ではないと思わされることが、これまでに何度あったことか。親といつても、血のつながりのない後の親は、所詮、当てにできないものだ。

※第一九句から「恋」が制限一杯の五句連続している所。「あだのなさけ」を、血縁関係のない親のこととして処理して、見事に「恋」を逃れている。紹巴の腕前である。

頼みがたきはなほ後の親

25 初瀬路や思はぬ方にいざなはれ 心前

《解釈》初瀬への往還の道から、不思議な縁で都に戻り、ある人の養女となったが、やはり、養父・養女の関係は、実の親子に比べて当てにならないものだ。

※『源氏物語』に拠る付合。頭中将と夕顔の間の子であるある玉蔓は、初瀬で、夕顔に仕えていた右近と出会い、その後、源氏に引きとられてその養女となるが云々のストーリーが一座に共有されていることが前提となる。

初瀬路や思はぬ方にいざなはれ

26 深く尋ぬる山時鳥 光秀

《解釈》初瀬への往還の道、時鳥の初音を聞くことを目的として来たわけではなかったのだが、つい山の奥深くまで寄り道をしてしまった。

深く尋ぬる山時鳥

27 谷の戸に草の庵をしめ置きて 有源

《解釈》谷の出入り口の所の庵を出て、時鳥の初音を聞こうと、山の奥深くまで尋ねてゆくことだ。

※「山時鳥」と「草の庵」とが寄合。「昔思ふ草の庵の夜の雨に涙なそへそ山時鳥」(新古今・三・二〇一、皇太后宮大夫俊成)の名歌がある。

※「草の庵」「草の戸」等の「草」は、卑下の詞で、植物として取り扱わないのが古来からの作法。従つて、第二九句の「松」と指合にはならない。

谷の戸に草の庵をしめ置きて

28 薪も水も絶えやらぬかげ 昌叱

《解釈》谷の出入り口の所に庵を営む。薪は山に入れば拾えるし、水は谷川の流れる汲めばよい。独居生活に支障はなさそうだ。

薪も水も絶えやらぬかげ

29 松が枝の朽ちそひにたる岩つたひ 兼如

《解釈》朽ち落ちた松の枝の上に、更に松の枝が朽ち落ちる岩伝い。水は岩間を流れる。この場所なら、当然、薪と水に不自由はしないだろう。

松が枝の朽ちそひにたる岩つたひ

30 あらためかこふ垣の古寺

心前

《解釈》朽ち落ちた松の枝の上に、更に松の枝が朽ち落ちる岩伝いを行くと、垣の崩れを補修した古寺が見える。

※通常の「垣」は居所であるが、この句の場合は「寺の垣」であるので、通常の居所とは二句を隔てるのみで可とされる。従って、第二七句の「庵」と指合にはならない。

あらためかこふ垣の古寺

31 春日野やあたりも広き道にして

紹巴

《解釈》開けた春日野の原、付近の往来の道も広々として、垣を新たに造成しなおした古寺が見える。

※「古寺」は、先の付合では奥まった所のさびれた小寺の雰囲気であるが、この付合では「春日野」を出すことによって広壮たる古寺（興福寺とか東大寺）のイメージとなる。

春日野やあたりも広き道にして

32 うらめづらしき衣手の月

行祐

《解釈》秋の夜、開けた春日野の広々とした道を行く。袖は夜露に濡れ、それに月が影を映す。何とも心惹かれる情趣である。

うらめづらしき衣手の月

33 葛の葉の乱るゝ露や玉ならむ

光秀

《解釈》月の夜、秋の野を行くと、葛の葉に置かれた露が、月の光を映しつつ風にこぼれる様は、まるで宝石の緒が切れたごとくである。その露は私の袖にこぼれ、それにまた月の光が映る。何とも心惹かれる情趣である。

※前句の「うらめづらし」の「うら」に「裏」を利かせて、それが「葛の葉」と寄合。「秋風の吹きうら返す葛の葉のうらみても猶恨めしきかな」（古今・五・八二三、平貞文）など。更に、「衣の裏」と「玉」とが寄合。『法華経』五百弟子受記品の「衣裏宝珠」のこと。「かけてだに衣の裏に玉ありと知らで過ぎけむ方ぞ悔しき」（後拾遺・一七・一〇二五、中宮内侍）など。

葛の葉の乱るゝ露や玉ならむ

34 たわゝになびく糸萩の色

紹巴

《解釈》秋の野、葛の葉に置かれた露が乱れ落ちる様は、まるで宝石の緒が切れたごとくである。糸萩は、その重みで撓んでいるように思えるほど枝いっぱい花を付け、風に靡いている。

※「乱る」と「糸」とが寄合。「青柳の糸よりかくる春しもぞ乱れて花の綻びにける」（古今・一・二六、つらゆき）など。

たわゝになびく糸萩の色

35 秋風もしらぬ夕べや寝る胡蝶

昌叱

《解釈》秋の夕べ、糸萩は、その重みで撓んでいるように思えるほど枝いっぱい花を付け、風に靡いている。蝶は、その糸萩の枝にとまったまま、風に靡くのも知らぬげに眠っているのか、微動だにしない。

※蝶を秋季に用いるのは、現代人には違和感があるかも知れないが、連歌にはよくあることである。「折りのこす枝や昨日の園の菊／秋の胡蝶の宿りはかなき」（元龜二年三月十八日「何船」五二／五二）など、解りやすい例であろう。勿論、単独では春季である。

※「萩」と「寝る」とが寄合。「まだ宵に寝たる萩かな同じ枝にやがておきぬる露もこそあれ」（後拾遺・四・二九七、新左衛門）など。

秋風もしらぬ夕べや寝る胡蝶

36 砌も深く霧をこめたる

兼如

《解釈》風のない秋の夕べ、砌は深く霧に籠められ、蝶は微動だにせず眠っている。砌も深く霧をこめたる

37 村竹の淡雪ながら片よりて

紹巴

《解釈》霧に立て籠められた砌、先ほどまで降っていた淡雪が群生した竹に積もって、全て一方に偏っている。

※「竹」は、木類とも、草類とも、間隔二句以上で可とされる。従って、第三四句の「糸萩」とも、第四〇句の「菖蒲菅原」とも、指合にならない。

村竹の淡雪ながら片よりて

38 岩根をひたす波の薄氷

昌叱

《解釈》積もった淡雪の重みで、岩間に群生した竹は、全て一方に偏り、薄氷を浮かべた波が岩根を浸している。

岩根をひたす波の薄氷

39 鴛鴨や下りゐて羽を交はすらむ

心前

《解釈》冬の水辺。薄氷を浮かべた波が岩根を浸し、鴛鴨などの水鳥が、そこに下りて、寒さに羽を交わすがごとく寄り集まっている。

鴛鴨や下りゐて羽を交はすらむ

40 乱れふしたる菖蒲菅原

光秀

《解釈》菖蒲や菅が交じり合って乱れ臥している水辺、鴛・鴨などの水鳥が、そこに下りて羽を交わすがごとく寄り集まっている。

※先の付合は冬の水辺の光景。この付合では、「菖蒲」の語に依り、夏の光景に変わる。「鴛」も「鴨」も、去嫌上の季節は冬であるが、夏にも見られるので（『日本の野鳥』福音館書店）、「菖蒲」と付合にするのは無茶ではないが、上出来とはいいかねる。

※第三八句から水辺が三句連続しているので体用の沙汰が必要であるが、第四〇句の

「菖蒲」は体用の外であるので、問題は生じない。

乱れふしたる菖蒲菅原

41 山風の吹きそふ音は絶えやらで

紹巴

《解釈》山風が吹き続いて、その音が絶えることはない。水辺の菖蒲や菅が交じり合っている叢も、その風に乱れ臥している。

※前句の「乱れふしたる」を、「山風」で理由付けた付合である。

山風の吹きそふ音は絶えやらで

42 閉ちはてにける住まひさびしも

有源

《解釈》山風が吹き続いて、その音が絶えることはない。それを防ぐために戸や窓を閉め切るが、独居生活のさびしさが身にしみる。

閉ちはてにける住まひさびしも

43 とふ人も暮れぬるまゝに立ち帰り

兼如

《解釈》夕暮になって、訪れてくれた人も帰ってしまった。居所の戸や窓を閉めると、独居生活のさびしさが、ひときわ身にしみる。

とふ人も暮れぬるまゝに立ち帰り

44 心のうちにあふや占なひ

紹巴

《解釈》夕暮になって、あの人は帰ってしまった。あの人には、私と夜の床を共にするつもりはないのだ。二人の仲は、これからどうなるのだろうか。占ってみたら、私の心に適った卦が出るだろうか。いや、そんなことはあるまい。

※先の付合は独居生活の寂しさ。それが、この付合では、不確実な恋に苦しむ女性のこととなる。句境の転換も鮮やかで、短い表現の中に、微妙な心理を感じさせる付合となっている。やはり紹巴と言えよう。

心のうちにあふや占なひ

45 はかなきを頼みかけたる夢がたり

昌叱

《解釈》あの人の心が、もう一度、私の所に戻ってくる、それがはかない願いだということとは承知しているが、ひよっとして思うような夢を見た。それを語って占ってみよう。私の心に適った卦が出るだろうか。いや、そんなことはあるまい。

※「夢がたり」は、夢の内容を人に語る。物語では、夢占いのための場合が多い。

『伊勢物語』に「昔、世ごとろつける女、……まことならぬ夢がたりす」(六三段)などと用いられている。「占」と「夢がたり」とが寄合になる。例は「とふにまこととを頼む占かた／夢がたり合はする人もむつまじみ」(天文二十四年梅千句・第十「花之何」一四／一五)など。

はかなきを頼みかけたる夢がたり

46 思ひに長き夜は明石瀧

光秀

《解釈》明石での旅宿。昨夜の夢を、伴う人に語る。都に帰るのは、はかない頼みでしかないが、様々の思いが胸に去来し、秋の夜が更に明かし難く感じる。

※「思ひ明かし」は、単独では「恋」に用いられることの多い表現であるが、「明石瀧」

(あるいは、浦)と結んだ場合は旅泊・流浪のこととなることが多い。ここもその例。従って、前句の「夢」は帰京・帰郷の夢となる。「夢がたり」とあるから、語る相手が想定される。それは、伴う人のはず。依って、解釈は右のごとくとなる、如何。

※『集成』は、この句について「光秀の胸中永く秘めた思いをいよいよ決行に移そうという気分がうかがわれる」とコメントするが、当たらない。発句で「時は今天が下しる」と高らかに宣言してしまっている(その注釈の説に依れば)のだから、こ

こで今更「思ひに……夜は明石瀧」などとウジウジしたことを言ってはならない。「思ひに夜を明かす」は、煩悶の表現である。いよいよ決行と言うつもりなら、「霧うち払ふ朝風の空」とでも言うべきであろう。「みがく剣の秋の夜すがら」なら、更に直截である。もつと率直に「信(まこと)に長き夜の闇を断つ」と付けたら、同座の連衆の顔は、全員、引きつることだろう。しかし、そんなことは有り得ない。

連歌は、古典和歌や物語の世界から様式化された情趣を、一座で共に享受しようとするものである。その点、実存的な感情の表出を目指す近代詩歌とは決定的に異なる。なお、第五八句、第六九句、第九七句を参照されたい。

思ひに永き夜は明石瀧

47 船はたゞ月にぞ浮かぶ波の上

有源

《解釈》明石での船中泊、月は皓々と海上の波を照らす。様々の思いが胸に去来し、長い秋の夜が更に明かし難く感じる。

船はたゞ月にぞ浮かぶ波の上

48 所ぐにちる柳かげ

心前

《解釈》水辺の柳が所々に散り、波の上に落ちる。それが月の光に照らされて浮かんでいるのは、まるで船のように見える。

※波の上に落ちた柳の葉を、船と見立てた付合で、当座の興を催すものである。

連歌にはよく用いられる発想で「船かと見れば月の川波／柳散る下葉はもろき秋風に」(平松文庫本無名千句・第一「山何」六八／六九)の例が分かりやすい。

所ぐにちる柳かげ

49 秋の色を花の春までうつし来て

光秀

《解釈》去年の秋に落葉した柳の木陰、今は、春の花が所々に散っている。《無理やり、右のごとく解釈した。付句はそれらしい言葉を並べているが、一句として、前句との関係性においても、論理の通った解釈ができない。つまり、付いていない、即ち、下手な句である。ただし、当時の「四花八(七)月」の作法によって、ここはどうしても「花」を出さねばならず、その点、少し難しい所ではある。ただし、愚案であるが「花散りし跡を惜しみ古里に」などではいけないだろうか？

秋の色を花の春までうつし来て

秋の色を花の春までうつし来て

《解釈》去年の秋に落葉した柳の木陰、今は、春の花が所々に散っている。

《無理やり、右のごとく解釈した。付句はそれらしい言葉を並べているが、一句として、前句との関係性においても、論理の通った解釈ができない。つまり、付いていない、即ち、下手な句である。ただし、当時の「四花八(七)月」の作法によって、ここはどうしても「花」を出さねばならず、その点、少し難しい所ではある。ただし、愚案であるが「花散りし跡を惜しみ古里に」などではいけないだろうか？

秋の色を花の春までうつし来て

秋の色を花の春までうつし来て

《無理やり、右のごとく解釈した。付句はそれらしい言葉を並べているが、一句として、前句との関係性においても、論理の通った解釈ができない。つまり、付いていない、即ち、下手な句である。ただし、当時の「四花八(七)月」の作法によって、ここはどうしても「花」を出さねばならず、その点、少し難しい所ではある。ただし、愚案であるが「花散りし跡を惜しみ古里に」などではいけないだろうか？

秋の色を花の春までうつし来て

秋の色を花の春までうつし来て

50 山は水無瀬の霞たつ暮

昌叱

《解釈》この地の秋の情趣の深さは、春となった今も、強い印象となって胸に残っているが、それでも、水無瀬の山々が夕霞の中に暮れてゆく景色の素晴らしきは、それ以上のものだと思われる。

※有名な「見わたせば山も霞む水無瀬川夕べは秋と何おもひけむ」（新古今・一三六、太上天皇）を本歌とする付合である。前句が下手な句なので、処理の難しい所であるが、そこを何とかするのがプロの連歌師。

山は水無瀬の霞たつ暮

51 下とくる雪の雫の音すなり

心前

《解釈》雪に覆われた水無瀬の里の夕暮、それでも、春となったので山々は霞がかつて見える。屋根などの雪も表面上の変化はないが、下の方が解けはじめたようで、それが雫となって、軒から滴り落ちる音がする。

下とくる雪の雫の音すなり

52 猶も折りたく柴の屋の内

兼如

《解釈》雪に覆われた陋屋、春となってもまだ寒さは厳しく、暖をとるために柴を折り焚く。すると屋根も暖められて、屋根に積もった雪の下の方が解けて、軒から雫となって落ちる。その音が聞こえる。

※前句の「下とくる雪」を理由付けた付合であるが、発想が突飛で意表を突いており、その俳諧味が当座で面白がられたであろう付合である。

53 しをれしを重ねわびたる小夜衣

紹巴

《解釈》柴の屋の独居生活。その辛さに流す涙に濡れ、私の衣は萎れてしまった。このままでは夜着として敷き重ねることができない。それを乾かすために、柴をさらに焚きくべるのだ。

※先の付合に続いて、前句の内容を付句で理由づけた付合であるが、その理由付け方が、先の付合同じく意表を突いており、しかも解りやすい。先の付合で雰囲気感が盛り上がった所を、更に、同じような趣向で盛り上げる。紹巴が、当時の上手として持て囃された所以の一つがうかがわれる付合である。なお、一句の去嫌上の取り扱いは「恋」となる。

しをれしを重ねわびたる小夜衣

54 思ひなれぬる妻もへだゝる

光秀

《解釈》長い間たがいに馴れ親しんだ妻との別れ。悲しみの涙で、私の衣の袖はびっしょりと濡れる。もう、この濡れた衣を重ねて、夜の床を共にすることはできないのだ。 ※「妻」に「棲」を利かせて、それと「衣」とが寄合。「唐衣きつゝ馴れにし妻しあればはる／＼来ぬる旅をしぞ思ふ」（古今・九・四一〇、在原業平朝臣）が有名。

思ひなれぬる妻もへだゝる

55 浅からぬ文のかず／＼つもるらし

行祐

《解釈》長い間たがいに馴れ親しんだ妻とも、今は離ればなれになっている。愛情あふれた手紙の交換が、多分、積もるほどにあることだろう。

浅からぬ文のかず／＼つもるらし

56 説けるも法は聞きつるにこそ

昌叱

《解釈》釈尊の説かれた教えは、数々の經典となつてこの世に山積している。しかし、それも、末世の衆生に理解するだけの能力があつてこそそのものだ。

説けるも法は聞きつるにこそ

57 賢きは時を待ちつゝ出づる世に

兼如

《解釈》釈尊の説かれた教えも、衆生に理解するだけの能力があつてこそそのもの。末世にはそれも難しいことも知れない。それでも、賢明な人は、教えに従い、塵の世を出て、弥勒出世の時を待つのだ。

※釈迦入滅後、弥勒出世までの間の「二億中間」のこととした付合である。付句の「出づる」は、第一義的には、「俗世を出づる」ことであるが、前句の「法」と照応して、重層的に、弥勒出世のことともなると解した。如何。

58 心ありける釣のいとなみ

光秀

《解釈》世に賢人と称される人は、落魄してもあせらずに、湖で釣りをしたりしながら、いつか世に出る機会を待っているものだ。

※前句の「賢き」を太公望の故事に取りなした付合である。太公望は本名・呂尚、かつて殷に仕えたが、そこを去り、渭水で釣をしていた所、周の文王と出会ったと伝えられる。『史記』齊太公世家に詳しい。連歌での例は「賢きはみな心にぞよる／＼釣たる／＼人も世にこそ仕へけれ」（菟玖波集・一八・一八四〇、前大納言尊氏）など。「賢し」と「釣」とが寄合になつている。

※賢者は自ら世に出ようとはせず、世に出る日を待つという付句である。作者は光秀。この百韻中の光秀の句から本能寺の変を前にした心理を読みとろうとするのは、この付合からでも誤つていふことが解る。それなら「心はいかに釣のいとなみ」とか「心や急ぐ釣のいとなみ」とかするはず。すると、一座は「あれ？」と思うのである。

心ありける釣のいとなみ

59 ゆく／＼も浜辺づたいの霧はれて

有源

《解釈》浜辺づたいの道を行く。霧は次第に晴れて、海上には、海士たちの釣する船が見える。海士は情趣を解しなと言われているが、この素晴らしい光景に、釣の手を休め眺め入っていることだろう。

※「海士は情趣を解しないものだが、それでも」とするのが伝統的な作法。「心ある雄島の海士の袂かな月やどれとは濡れぬものから」（新古今・四・三九九、宮内卿）が有名。



ゆく／＼も浜辺づたひの霧はれて

## 60 一すぢ白し月の川水

紹巴

《解釈》浜辺づたひの道を行く。霧は次第に晴れ、その絶え間に一筋の白く光るものが見える。あれは、浜に注ぐ川の水に、月の光が映じているのだ。

※第五八句から水辺が三句連続しているので体用の沙汰が必要であるが、第五八句の「釣」は体用の外であるので、問題は生じない。

一すぢ白し月の川水

## 61 紅葉をわくる龍田の峰風

昌叱

《解釈》秋の龍田の月の夜、峰から吹き下ろす風が、紅葉葉を分け過ぎる。その分けられた紅葉の隙に、龍田川の水が月影をうけて、一筋白く光って見える。

紅葉をわくる龍田の峰風

## 62 タベさびしき小男鹿の声

心前

《解釈》龍田の峰から吹き下ろす風が、紅葉葉を分け過ぎる夕べ、牡鹿の寂しそうに鳴く声が聞こえる。

※「紅葉」と「鹿」とが寄合。「奥山に紅葉ふみ分け鳴く鹿の声きく時ぞ秋はさびしき」(古今・四・二一五、よみ人しらす)など。

夕べさびしき小男鹿の声

## 63 里遠き庵もあはれに住みなれて

紹巴

《解釈》里から遠く離れたこの庵も、今はようやく住み馴れ、寂しいともつらいともそれほど感じなくなっているのだが、それでも、夕方、牡鹿の寂しように鳴く声が聞こえると、時に、たまらない思いになることがあるのだ。

里遠き庵もあはれに住みなれて

## 64 捨てし憂き身も頼みこそあれ

行祐

《解釈》生きても甲斐のない身、俗世間に住むよりはと思つて、人里から遠く離れたこの庵での独居生活を始めたのだが、馴れてくると、次第に、辛ければ辛いなりに何とかやって行こうというような気持ちが生じてきた。

捨てし憂き身も頼みこそあれ

## 65 みどり子の生ひたつ末を思ひやり

心前

《解釈》辛いことばかりの世を捨てた自分であるが、たった一つだけ楽しみにしていることがある。それは、世間に残してきた愛し子が、これから先、どのように成長してくれるだろうかということだ。

みどり子の生ひたつ末を思ひやり

## 66 なほ長かれの命ならずや

昌叱

《解釈》こんな歳になって、新たに子宝に恵まれることになった。この子が、これから先どのように成長してくれるか、それを見届けたいと思う。そのためにも、さらに長生きがしたくなる。

なほ長かれの命ならずや

## 67 契りたゞかけつゝ酌める杯に

宥源

《解釈》ある人の長寿の賀の席、そこに集う人々は、更なる長寿を祈念して酒を酌み交わすのだ。

契りたゞかけつゝ酌める杯に

## 68 別れてこそは相坂の関

紹巴

《解釈》東国に赴く人を、相坂の関まで見送る。再会を約し、酒を酌み交わす。

※「相坂の関」は、京から東国への玄関口に当たる。東国に赴く人をそこまで見送る習慣があったことは、「ものへまかりける人の送り、関山までし侍るとて…別れゆく今日はまどひぬ相坂は帰りこむ日の名にこそありけれ」(拾遺・六・三二四、つらゆき)などより知れる。「相坂」に「会ふ」を利かせるのは、古典文学の常識。

別れてこそは相坂の関

## 69 旅なるを今日はあすはの神もしれ

光秀

《解釈》相坂の関、再会を期しつつ旅行く人と別れる。今日この日、あすはの神も、旅人の身の安全に力をお貸し下さいますよう。

※「あすはの神」は、『万葉集』巻二十に「庭中のあすはの神に小柴さし我は斎はむ帰り来までに」とある神。歌は、防人となった夫の無事帰還を祈る妻のもので、西国に出陣する光秀の立場によく適った句材であり、それは同座の連衆にも容易に共有されたはず。連歌において個人的な感懐の表出は、このようになされるものである。

※「今日はあすはの」の口調が軽い。第一七句の「月は秋秋はもなか」や第四〇句の「菖蒲菅原」や第四六句の「夜は明石瀉」もそうだが、光秀の好みであろう。ただし、いずれの句も、紹巴・昌叱・心前等に比較すれば、前句との関係性は今一つの感が強い。所詮、アマチュアの芸ということであろうか。

旅なるを今日はあすはの神もしれ

## 70 ひとり眺むる浅茅生の月

兼如

《解釈》秋の夜、この浅茅生の宿で、ひとり月を眺める。夫は旅に出て、今日もまだ帰らない。庭中のあすはの神よ、どうか夫の身をお護り下さい。

ひとり眺むる浅茅生の月

## 71 爰かしこ流るゝ水の冷やかに

行祐

《解釈》秋の夜、浅茅生の宿で、ひとり月を眺める。あちこちを流れる水は、月の光を受けて、いかにも冷ややかである。

爰かしこ流るゝ水の冷やかに

## 72 秋の螢や喜いそぐらむ

心前

《解釈》初秋の野の沢、あちこちを流れる水も冷ややかである。日が暮れるのも早くなくなつたが、螢も、それに合わせて早くから光を放ち始めることとくである。

秋の螢や暮いそぐらむ

73 村雨のあとよりもなほ霧降りて

紹巴

《解釈》村雨の通り過ぎた後も、まだ霧が立ちこめて暗い。螢も、かん違いしたのか、夕暮にはなっていないのに、光を放ちはじめた。

村雨のあとよりもなほ霧降りて

74 露はらひつゝ人のかへるさ

有源

《解釈》村雨の降り通った後も、まだ霧が立ちこめて暗い。雨宿りしていた人たちは、道の辺にまだ残る露を払いながら帰ってゆくとして暗い。

※「村雨」と「露」とが寄合。「村雨の露もまだ干ぬ榎の葉に霧たちのぼる秋の夕暮」(新古今・五・四九一、寂蓮法師)が、名歌として有名。

露はらひつゝ人のかへるさ

75 宿とする木かげも花のちりつくし

昌叱

《解釈》花の木陰を宿として日をおくるうちに、花はすべて散ってしまった。花との別れを惜しむ涙の露を払いつつ、人々は帰って行くのだ。

※桜花が散りつくすのを惜しんで涙を流すというのは、伝統としてパターン化された発想である。例としては「散る花を惜しむ涙の春雨に濡れぬ人こそ世になかりけれ」(重之集・六六)が解りやすい。

宿とする木かげも花のちりつくし

76 山より山にうつる鶯

紹巴

《解釈》山の花の木陰を宿とする鶯。この山の花は散りつくしたので、まだ花の残っている別の山に宿を移すのだ。

山より山にうつる鶯

77 朝霞薄きが上に重なりて

光秀

《解釈》春の朝、薄く霞に包まれた山の上に、更に向こうの山がいくつか重なって見える。鶯は、それらの山々を自由に鳴き移って行く。

※前句の「山より山」に対して「重なりて」としたのが、付合のポイント。朝霞が薄いので、奥の山までが重なって見えるという理屈である。霞が深いと、近くの山しか見えない。

朝霞薄きが上に重なりて

78 引きすてけらし横雲の空

心前

《解釈》横雲がたなびく春の朝の空、それに霞が薄く覆い重なっている。風はなく、横雲は棚びいたまま放置されたように、動かない。

※先の付合では、重なるのは山々。この付合では、横雲に霞が重なることになる。

引きすてけらし横雲の空

79 出でなむも波風かはるとまり船

兼如

《解釈》停泊中の船が湊を出ようとしていたが、波風の様子が怪しい。空に棚びいて

いた横雲も、風に千切れて捨てられたように、どこかへ行ってしまった。

※「捨てけらし」の意味が、先の付合とは変わる。この付合では「捨てられたように、どこかに消える」ということになる。

出でなむも波風かはるとまり船

80 めぐる時雨の遠き浦へ

昌叱

《解釈》停泊中の船が湊を出ようとしていたが、波風の様子が怪しくなった。時雨の雲が、遠くに見える浦々を通過してゆくのが見渡される。あの時雨が通り過ぎて波風が落ち着くまで、出発を見合わせることにしよう。

※晩秋から初冬、低気圧に伴う前線が通過すると、突風が吹き、海は時化する。

めぐる時雨の遠き浦へ

81 村芦の葉隠れ寒き入日影

心前

《解釈》冬の海辺の夕暮。時雨の雲が、遠くの浦々を通過してゆくのが見渡される。寒々とした日が、群生する枯芦の葉隠れに今しも沈み入ろうとしている。

※第七九句から水辺が三句連続しているので体用の沙汰が必要であるが、第八一句の「芦」は体用の外であるので、問題は生じない。

村芦の葉隠れ寒き入日影

82 立ちさわぎては鳴の羽がき

光秀

《解釈》寒々とした夕日が、群生する枯芦の葉隠れに、今しも沈み入ろうとしている。鳴たちの羽掻きの音が騒がしく聞こえる。

立ちさわぎては鳴の羽がき

83 行く人もあらぬ田の面の秋すぎ

紹巴

《解釈》秋の収穫を終えた田は、通う人もいない。ただ、鳴たちの羽掻きの音が騒がしく聞こえるばかりである。

※「鳴」と「田」とが寄合。「風をいたみ刈田の鳴のふしわびて霜に数かく明方の空」(続後撰・八・四八五、惟明親王)など。

行く人もあらぬ田の面の秋すぎ

84 かたぶくまゝの苦ぶきの露

有源

《解釈》秋の収穫を終えた田は、通う人もいない。田を守るための苦苺きの仮庵も、柱が傾いたまま顧みられずに露に濡れている。

※「田」と「苦ぶき」とが寄合。「秋の田の仮庵の庵の苦をあらみ我が衣手は露にぬれつゝ」(後撰・六・三〇二、天智天皇御製)が有名。

かたぶくまゝの苦ぶきの露

85 月見つゝ打ちもや明かず麻衣

昌叱

《解釈》老朽化して傾いたままの苦苺きの住まい、あたりは夜露に満ちている。住む人は、今夜、月を眺めながら、明けるまで麻衣を打ち続けるのであろうか。

※「かたぶく」に「月」と付けているのがポイント。他に「色なる草の垣ほかたぶく

／月やどる露もやおもき萩が枝（称名院追善千句・第五「山河」五四／五五）など。

月見つゝ打ちもや明かず麻衣

86 寝もせぬ袖の夜半のやすらひ

行祐

《解釈》毎夜、明けるまで寝ずに打ち続けるはずの砧の声、それがふと止んだ。月を眺めながら一休みしているのだろうか。

寝もせぬ袖の夜半のやすらひ

87 しづまらば更けて来むとの契りにて

光秀

《解釈》「夜が更けて人が寝静まったら、きつと訪ねて行きます。それから朝まで語り明かしましょう」と、あの人は約束してくれました。それまで、まだ少し間がありそうだ。一休みしておこう。

しづまらば更けて来むとの契りにて

88 あまたの門を中のかよひ路

兼如

《解釈》「夜が更けて人が寝静まったら、必ず訪ねて行きます」と、あの人は約束したが、どうしてそんなに遅くなるのか。気の多いあの人のことだから、多分、何人かの女の人の家を訪ねてから、ここに来るつもりなのだろう。

あまたの門を中のかよひ路

89 埋みつゝ竹は掛樋の水の音

紹巴

《解釈》地下に埋められていた竹の埋み樋が地上に出て、掛け樋となって流れて行く音がする。この水は、幾つかの家の門の地下を潜って来たものである。

※先の付合は、多情な男のこと。それを、意表を突く発想で、埋み樋を通る水のことにして、句境を大胆に転換している。当座の興を催す付合であろう。やはり紹巴である。

※「通ふ」に「掛樋」と付けているのがポイント。他に「通はぬ道の程ぞ知らるゝ末こほる掛樋の中のみ水」（聖廟千句・第六「何船」七二／七三）など。

埋みつゝ竹は掛樋の水の音

90 石間の苔は幾重なるらむ

心前

《解釈》地下の竹の埋み樋が地上に出て、掛け樋となって流れて行く音がする。掛け樋が通って行く岩間は、どれほど深く苔むしているだろうか。

※岩間は日当たりが悪く、そこを通る掛樋からこぼれ落ちる水で苔がよく生育するという理屈である。

石間の苔は幾重なるらむ

91 瑞垣は八千代経ぬべきとばかりに

行祐

《解釈》瑞垣で囲われた神社の境内。その庭の立石は、この神社の永遠を示すがごとくである。その間に、石間の苔は、どれほど生い重なるであろうか。

※前句の「石」を、神社の境内の組石に取りなして句境を転じた付合である。

※「苔」と「八千代」とが寄合。「我が君は千代に八千代のさざれ石の巖となりて苔

のむすまで」（古今・七・三四三、よみ人しらず）。

瑞垣は八千代経ぬべきとばかりに

92 翁さびたる袖の白木綿

昌叱

《解釈》瑞垣に囲われた神社の境内、いかにも高齢の祢宜が、白木綿を手に執り、「千代に八千代」と、世を折っている。

翁さびたる袖の白木綿

93 明くるまで霜夜の神樂さやかにて

兼如

《解釈》冬の霜夜、神社の境内では、いかにも高齢の祢宜が白木綿を手にとり舞っている。今夜は、夜が明けるまで、さやかに神樂が執り行われるのだ。

明くるまで霜夜の神樂さやかにて

94 とりぐゝにしもうたふ声そふ

紹巴

《解釈》今夜は、夜が明けるまで、さやかに神樂が執り行われるのだ。舞手は、曲ごとにとりどりの採り物を持ち、器樂にあわせて謡う。

※第九一句から「神祇」が制限一杯の三句続けられており、付句の非常に難しい所であるが、「とりぐゝにしもうたふ」ということで、神樂の採り物を暗示し、表面的には「神祇」の語を用いずうまく付けおけている。見事と言えるほどの巧妙なテクニクであり、やはり紹巴の芸である。

※「神樂」と「うたふ」が寄合。「更けぬるか真弓櫛弓おし返しうたふ神樂の本末の声」（続千載・九・九二〇、前大納言為世）など。ただし「神樂」に「うたふ」と付けるのは用付で、当時の連歌では嫌われるはずだが、付合の難しい所なので、そんな細かなことは言っていられなかったのであろう。

とりぐゝにしもうたふ声そふ

95 はるぐゝと里のまへ田をうゑ渡し

有源

《解釈》早乙女たちは、銘々に早苗を手に取り、田植歌をうたいながら、里の前から続く田を、ずっと植えわたして行く。

※「とりぐゝ」は、先の付合では神樂の採り物のこと。それを、早乙女たちの早苗に取りなして、句境を鮮やかに転じた好付合である。ちよっとしたことだが、「とりぐゝ」に「はるぐゝ」と口調を対応させている所がミソ。

はるぐゝと里のまへ田をうゑ渡し

96 縄手のゆくへたゞ路とは知れ

光秀

《解釈》里の前から続く田を、ずっと植えわたして行く。田と田の間の道は真っ直ぐ遙かに延びている。

※「縄手」は「田の間の道、あぜ道」（岩波古語辞典）。連歌には珍しい語であるが「苗代水の引板の寂しき／草しげき小家の縄手雨すぎて」（伊勢千句・第四「薄何」四四／四五）などの例が存在する。「田」の寄合として用いられているはずである。

97 縄手のゆくへたど路とは知れ  
勇むれば勇むるまゝの馬の上

昌叱

《解釈》縄手道はどこまでも真っ直ぐに続いている。馬上の武士が勇み立てば、馬もそれに応じて、勇んでその道を駆けて行く。

※近日中に西国に出陣する光秀を激励する挨拶の句。勿論それは、同座の連衆に共有されている思いである。挙句近くになって、このような張行の目的に適った句がスムーズに出てきたのは、幸先のよいこととして、一座に喜ばれたであろう。

勇むれば勇むるまゝの馬の上

98 うち笑みつゝもつるゝ伴ひ

行祐

《解釈》二騎の武者が、勇みたつて馬を走らせている。どちらが先陣をするか、互いにっこり微笑んで、相手を確認している。

※前の付句で、張行目的に適った好句が出て盛り上がった所に、さらに、たたみかけるように、軍記絵巻に出てきそうな戦場に向かう武士の「カッコよい」姿を出して、座を盛り上げる。宗匠である紹巴の見事な座の捌きを思うべきであろう。

うち笑みつゝもつるゝ伴ひ

99 色も香も酔をすゝむる花の下

心前

《解釈》色も香も満開の花の下、人々は、太平の春を寿ぎつつ、楽しく微笑みながら酒を酌み交わしている。興は尽きることがない。

色も香も酔をすゝむる花の下

00 国ぐは猶のどかなる時

光慶

《解釈》色も香も満開の花の下、人々は楽しく酒を酌み交わしている。天の下の国々は、更に、太平の世ののどかな春を享受するのだ。

※「国ぐ」は多分、発句の「天が下」に対応して選ばれた語であろう。また、句末の「時」は、発句の「時は今」の「時」と、意図的に重ねられたと思われる。慶賀の気分で一座を終えるのが挙句の作法。その作法どおりの句である。

※作者・光慶は光秀の嫡子・明智十五郎（異説あり）。当時十四歳くらいと伝えられる。本能寺変後の一連の戦いの中で戦死か。出句はこの一句のみ。『林鐘談』に拠れば紹巴の代作だとのことであるが、真偽不明。

## 「愛宕百韻」去嫌一覧（I）

		季	七	恋	旅	述	植	動	山	水	居	降	聳	光	神	積	人	名	衣	時	夜	風	聞	
初表	01	ときはいま あめかしたなる さつきかな	夏									□	□											
	02	みなかみまさる にはのなつやま	夏						山	水	居													
	03	はなおつる いけのなかれを せきとめて	春				木			水														
	04	かせにかすみを ふきおくるくれ	春										聳								夕	風		
	05	はるもなほかねのひひきや さえぬらむ	春																			夜	聞	
	06	かたしくそては ありあけのしも	冬										降	光						衣	夜			
	07	うらかれになりぬるくさの まくらして	秋	枕		旅	□															夜		
	08	ききなれにたる のへのまつむし	秋					虫																
初裏	09	あきはたた すずしきかたに ゆきかへり	秋																					
	10	をのへのあさけ ゆふくれのそら							山												×			
	11	たちつつく まつのこすゑや ふかからむ		松			木																	
	12	なみのまかひのいりうみのさと								水	居													
	13	こきかへる あまのをふねのあととほみ		船						水								人						
	14	へたりぬるも ともちとりなく	冬					鳥	水															
	15	しはしたた あらしのおとも しつまりて																					風	聞
	16	たたよふくもはいつちならむ												聳										
	17	つきはあき あきはもなかの よはのそら	秋	月											光							夜		
	18	それとはかりの こゑほのかなり	秋				□																	聞
	19	たたくとの こたへほとふる そてのつゆ	秋		恋						居	降									衣			
	20	われよりさきに たれちきるらむ			恋													人						
21	いとけなき けはひならぬはねたまれて			恋																				
22	といひかくいひそむくるしさ			恋																				
二表	23	たひたひの あたのなさは なにかせむ			恋																			
	24	たのみかたきは なほのちのおや																人						
	25	はつせちやおもはぬかたに いさなはれ																	名					
	26	ふかくたつぬる やまほとときす	夏					鳥	山															
	27	たにのとに くさのいほりを しめおきて					×		山		居													
	28	たききもみつも たえやらぬかけ								水														
	29	まつかえの くちそひにたる いはつたひ		松			木																	
	30	あらためかこふかきのふるてら									□							積						
	31	かすかのやあたりもひろきみちにして																	名					
	32	うらめつらしき ころもてのつき	秋	衣月											光						衣	夜		
	33	くすのはの みたるつゆやたまならむ	秋				草						降											
	34	たわわになひくいと はきのいろ	秋				草																	
35	あきかせも しらぬゆふへやぬるこてふ	秋					虫														夕	風		
36	みきりもふかく きりをこめたる	秋								□	□	聳												
二裏	37	むらたけの あはゆきなからかたよりて	冬	竹			竹					降												
	38	いはねをひたす なみのうすらひ	冬							水														
	39	をしかもやおりゐてはねを かはすらむ	冬					鳥	水															
	40	みたれふしたる あやめすかはら	夏				草			水														
	41	やまかせの ふきそふおとはたえやらて							山														風	聞
	42	どちはてにける すまひさひしも									□													
	43	とふひとも くれぬるまにたちかへり																人			夕			
	44	こころのうちに あふやうらなひ			恋																			
	45	はかなきを たのみかけたる ゆめかたり		夢	恋																		夜	
	46	おもひになかき よはあしかた	秋			旅				水									名			夜		
	47	ふねはたた つきにそうかふなみのうへ	秋	船月						水					光							夜		
	48	ところどころに ちるやなきかけ	秋				木																	
	49	あきのいろを はなのほるまて うつしきて	春				木																	
	50	やまはみなせの かすみたつくれ	春							山				聳					名		夕			

「愛宕百韻」去嫌一覧 (Ⅱ)

		季	七	恋	旅	述	植	動	山	水	居	降	聳	光	神	積	人	名	衣	時	夜	風	聞		
三 表	51	したとくる	ゆきの	しつくの	おとすなり							降											聞		
	52	なほもをりたく	しはの	やのうち			×				居														
	53	しをれしを	かさね	わたる	さよ	ころも													衣		夜				
	54	おもひなれぬ	つまも	へた	たる												人								
	55	あさからぬ	ふみのか	すかす	つも	らし																			
	56	とけるもの	りは	きき	うに	こそ											積								
	57	かしこきは	ときを	まち	つ	いつ	よに																		
	58	こころあり	ける	つりの	いと	な	み				水														
	59	ゆくゆくも	はま	へ	つ	た	ひの	きり	は	れて			□	聳											
	60	ひとす	ちしろ	し	つき	のか	は	みつ			水				光							夜			
	61	もみちは	を	わ	くる	た	つ	た	の	み	ね	お	ろ	し					名				風		
	62	ゆふへ	さ	ひ	し	き	さ	を	しか	の	こ	ゑ										夕		聞	
	63	さととほ	きい	ほも	あ	は	れ	に	す	み	な	れ													
	64	すてし	う	き	み	も	た	の	み	こ	そ	あ	れ												
三 裏	65	みどり	この	お	ひ	た	つ	す	ゑ	を	おも	ひ	や	り											
	66	なほ	なか	か	れ	の	い	の	ち	なら	す	や													
	67	ち	き	り	た	た	か	け	つ	つ	く	め	る	さ	か	つ	き	に							
	68	わ	か	れ	て	こ	そ	は	あ	ふ	さ	か	の	せ	き										
	69	た	ひ	な	る	を	け	ふ	は	あ	す	は	の	か	み	も	し	れ							
	70	ひ	と	り	な	か	む	る	あ	さ	ち	ふ	の	つ	き								夜		
	71	こ	こ	か	し	こ	な	か	る	み	つ	の	ひ	や	や	か	に								
	72	あ	き	の	ほ	た	る	や	く	れ	い	そ	く	ら	む								夕		
	73	む	ら	さ	め	の	あ	と	よ	り	も	な	ほ	き	り	ふ	り	て							
	74	つ	ゆ	は	ら	ひ	つ	つ	ひ	と	の	か	へ	る	さ										
	75	や	と	と	す	る	こ	か	け	も	は	な	の	ち	り	つ	く	し							
	76	や	ま	よ	り	や	ま	に	う	つ	る	う	く	ひ	す										
	77	あ	さ	か	す	み	う	す	き	か	う	へ	に	か	さ	な	り	て							
	78	ひ	き	す	て	け	ら	し	よ	こ	く	も	の	そ	ら								夜		
名 表	79	い	て	な	む	も	な	み	か	せ	か	は	る	と	ま	り	ふ	ね					風		
	80	め	く	る	し	く	れ	の	と	ほ	き	う	ら	う	ら										
	81	む	ら	あ	し	の	は	か	く	れ	さ	む	き	い	り	ひ	か	け					▽		
	82	た	ち	さ	わ	き	て	は	し	き	の	は	ね	か	き										
	83	ゆ	く	ひ	と	も	あ	ら	ぬ	た	の	も	の	あ	き	す	き	て							
	84	か	た	ふ	く	ま	ま	の	と	ま	ふ	き	の	つ	ゆ										
	85	つ	き	み	つ	つ	う	ち	も	や	あ	か	す	あ	さ	こ	ろ	も					衣	夜	
	86	ね	も	せ	ぬ	そ	て	の	よ	は	の	や	す	ら	ひ								衣	夜	
	87	し	つ	ま	ら	は	ふ	け	て	こ	む	と	の	ち	き	り	に	て					夜		
	88	あ	ま	た	の	か	と	を	な	か	の	か	よ	ひ	ち										
	89	う	つ	み	つ	る	た	け	は	か	け	ひ	の	み	つ	の	お	と							聞
	90	い	し	ま	の	こ	け	は	い	く	へ	な	る	ら	む										
	91	み	つ	か	き	は	や	ち	よ	へ	ぬ	へ	き	と	は	か	り	に							
	92	お	き	な	さ	ひ	た	る	そ	て	の	し	ら	ゆ	ふ										
名 裏	93	あ	く	る	ま	て	し	も	よ	の	か	く	ら	さ	や	か	に	て					△	夜	
	94	と	り	と	り	に	し	も	う	た	ふ	こ	ゑ	そ	ふ									聞	
	95	は	る	は	る	と	さ	と	の	ま	へ	た	を	う	ゑ	わ	た	し							
	96	な	は	て	の	ゆ	く	へ	た	た	ち	と	は	し	れ										
	97	い	さ	む	れ	は	い	さ	む	る	ま	ま	の	う	ま	の	う	へ							
	98	う	ち	ゑ	み	つ	つ	も	つ	る	と	も	な	ひ											
	99	い	ろ	も	か	も	ゑ	ひ	を	す	す	む	る	は	な	の	も	と							
	00	く	に	く	に	は	な	ほ	の	と	か	な	る	と	き										